

## 石器から神奈川をみる

鈴木 次郎

過日、「かながわの遺跡展」<sup>(1)</sup>とその「巡回展」<sup>(2)</sup>が開催され、担当者として企画・展示に関わった。展示では、これまでの神奈川県内の発掘調査で出土した資料の中から石器を取り上げ、用途ごとに分類してそれぞれ旧石器時代から弥生時代までどのように変遷したのかを示した。展示資料を出土遺物の一部である（旧石器時代遺跡ではほぼ全てといえるが）石器に限定したことに対して批判的な意見が多いのではという心配もあったが、そうした意見は少数で、観覧者の多くはこうした展示もあると肯定的であった。今回の展示では、もう一つの眼目として、各石器の石材を明らかにし、可能ならばそれらが原石もしくは素材として、あるいは製作された完成品として何処から入手したのかを明らかにしたいと思った。このため、石器石材研究の専門家である柴田徹氏（考古石材研究所）に依頼して展示資料約1,500点の石器石材をすべて観察・鑑定していただいた。その結果、旧石器時代だけではなく縄文時代や弥生時代においても、石器を通してみた神奈川の地域性が明らかとなり、さらに、石器石材の入手や石器の生産と供給といった流通を議論する材料を提供しうることにも明らかとなった。

以下、今回の展示資料をもとに主な石器についての石器石材や石器（完成品）の入手先のあり方について述べてみたい。もとより今回の展示資料は県内の資料の一部に過ぎず、これらの

資料のみで県内全域について語ることはできないことはいうまでもないが、相模野台地を中心とした県央部での石材利用のあり方を明らかにすることは可能と考えられる。なお、ここで述べる石器石材名はいずれも柴田氏の鑑定結果に基づくものである。

まず、縄文時代の石器の約1/3を占める石皿や磨石などの礫塊石器についてみると、ほとんど例外なく遺跡周辺で採取可能な相模川の閃緑岩・富士玄武岩・各種の凝灰岩類等を石材としている。旧石器時代の礫塊石器は、石槌や台石と磨石状礫など多くはないが、相模川の凝灰岩類と富士玄武岩を石材としており、弥生時代の礫塊石器も同様に相模川など遺跡周辺にある石材を利用している。

次に、打製の剥片石器をみると、旧石器時代では、相模川の硬質細粒凝灰岩とホルンフェルスのほか、多摩川のチャートや珪質頁岩、箱根のガラス質黒色安山岩、利根川の黒色頁岩など近隣地域の石材も多く利用され、さらに信州・神津島・箱根・伊豆柏峠などの黒曜石や遠く日本海側の硬質頁岩も原石や素材剥片として入手し、広域な石材利用が行われている。これに対して、縄文時代の剥片石器は、旧石器時代とほぼ共通したあり方を示す草創期を例外として、早期以降では相模川の硬質細粒凝灰岩やホルンフェルス、多摩川のチャートなどが近隣地域を含む地元の石材として利用され、これに遠隔地

石材として信州及び神津島の黒曜石が利用されている。黒曜石の産地は、海岸寄りの遺跡では神津島産、海岸から離れた山間部の遺跡では信州産の黒曜石が多いという傾向が認められ、旧石器時代に利用されていた箱根産及び伊豆柏峠産の黒曜石はほとんど利用されていない。また、縄文時代には、打製石斧のホルンフェルス、石鏃の黒曜石といった時期を越えて特定の石材を多用する石器が認められる。弥生時代では、剥片石器そのものがけっして多くはないが、やはり地元の硬質細粒凝灰岩・ホルンフェルスと遠隔地の黒曜石が利用され、黒曜石はほぼ神津島産に限られる。

刃部のみを研磨した局部磨製を含む磨製石斧の石材利用をみると、旧石器時代前半の石斧は、凝灰岩類を中心にホルンフェルスを含む相模川の石材を利用しており、こうした凝灰岩類とホルンフェルスの利用は縄文時代草創期以降も前期前半まで継続して認められる。そして、縄文時代前期後半には、器面全体を研磨した乳棒状磨製石斧が登場するが、大井町矢頭遺跡や横浜市細田遺跡では埼玉県秩父～比企地方の緑色岩を石材としており、遺跡内で製作した痕跡がみられないことから完成品として搬入されたと考えられる。磨製石斧は、前期後半以降、石材産地で集中的に生産して各地に供給する流通システムが認められる。中期には、相模川沿いの大規模な集落遺跡で乳棒状磨製石斧が製作されているが、これらは集落内での自給的な生産で、唯一山北町尾崎遺跡が他地域への供給を前提とした乳棒状磨製石斧の生産遺跡としてとらえられる。また、乳棒状磨製石斧に共伴する小形の

定角式磨製石斧は、透閃石岩（その多くはかつて蛇紋岩と呼ばれていた）や翡翠輝石岩といった新潟・富山県境一帯にみられる石材を利用しており、彼の地から完成品として持ち込まれたもので、縄文時代後期の定角式磨製石斧も同様である。一方、弥生時代中期後半に特徴的にみられる大陸系磨製石斧では、まず大型蛤刃石斧は、県内各遺跡で斑瀾岩が変質した緑色岩を多く利用しているが、これらの石材は長野県北部の榎田遺跡・松原遺跡等で多量に出土している石斧と類似しており、この地域から完成品として搬入された可能性が考えられる。これに対して柱状片刃石斧と偏平片刃石斧は、一部には大型蛤刃石斧と同様の緑色岩もみられるが、多くは地元の凝灰岩類を石材として製作されている。特に、相模川左岸の自然堤防上に立地する海老名市河原口坊中遺跡では、偏平片刃石斧や柱状片刃石斧のみならず一部大型蛤刃石斧の生産も行われたようである。

最後に、縄文時代の玦状耳飾や大珠・垂飾りなどの装身具をみると、地元の石材は細粒凝灰岩が少数みられるだけで、大半は滑石・翡翠・透閃石岩・アルビタイトといった搬入石材を利用しており、その多くは完成品としてもたらされたと考えられる。

以上、今回の展示を振り返って思いつくままに述べてきた。ここで示した内容は、今後県内の他の資料や県外の関係する資料によって検証する必要があると考えている。特に、磨製石斧や装身具については、生産遺跡の探索とその資料との突き合わせが不可欠な手続きといえる。

註 1 かながわの遺跡展 2008『発掘された石の道具―旧石器時代～弥生時代の石器・石製品―』

(会場：神奈川県立歴史博物館、期間：2008年12月6日～26日、主催：神奈川県教育委員会)

註 2 巡回展 (会場：綾瀬市役所7F市民展示ホール、期間：2009年1月10日～2月1日、主催：神奈川県教育委員会・綾瀬市教育委員会)

## 「近代遺跡にみる神奈川の夜明け」 の感想について

関 秀行

### ■はじめに

まずは、発表会では様々な方のご意見をうかがうことができ、また、このような感想文を書く機会をいただいたことに、深く感謝申し上げます。しかしながら、小特集「近代遺跡にみる神奈川の夜明け」の寄稿文の執筆依頼を受け、大変恐縮しているのが現状です。

なぜなら、私の専門は建築の設計であって、考古学や土木建築史の専門家ではないからです。そのため、いざ筆をとってみると、何を書いてよいのか考え込んでしまいましたが、当日は、奇しくも近代化遺産の日（10月20日）の週末であり、このような感想を寄稿できるのも何かの縁だと思い、研究発表の感想とともに、昨今感じていることについて、自分の立場からの視点で書かせていただきました。

考古学的にはスタンスの違いに当惑されるかも知れませんが、参考として少しでも皆様のお役にたつことができれば幸いです。

### ■発表についての感想

#### 1.横浜市 山下居留地遺跡

私の仕事の活動拠点のすぐ近くにあり、また、以前から思い入れのあったこの場所での発掘調査は、並ならぬ期待感をもって注目しておりました。確か、発掘調査は2007年9月頃から始まったと記憶していますが、作業が進むにつれ、地中から徐々に姿をあらわしてくる遺構は、フェンス越しからではありませんが、毎日ドキドキした気持ちで見守らせていただけていました。なかでも55番地の建物煉瓦基礎や貯水槽は、明治初期のコッキング商会が行った居留地内の発電供給事業の遺構と思われる、コッキング氏が造営した先進的な

#### 横浜市山下居留地遺跡の煉瓦基礎群

江ノ島植物園の遺構とあわせて見ると、大変興味深いものでありました。

その他にも多くの特筆すべき出土物があり、旧駿河町通りの道路遺構の側溝や配管設備（排水瓦土管・瓦斯鉄管等）、54番地のイリス商会のドイツタイル、48番地の煉瓦及び石組の地下室、境界石（30,60,61番地の境界を示す刻印がある）など、建築・産業・土木・文化の総合近代遺跡として重要な出土物が相次ぎ、発掘調査時得られた資料をもとに、居留地の解明のみならず、近代日本の夜明けの詳細として、今後の研究に大きな期待を寄せるものでした。

ちなみに、今回の現場（山下町48,54,55番地）及び周辺は、震災復興期である昭和初期に幾つかのRC建築物が建設された地区でもあります。今は無き警友総合病院（48番地）、県警本部分庁舎（旧ヘルムハウス、53番地）もそのひとつです。また、震災前の建築としては警友病院別館（旧露亜銀行横浜支店、51番地）が、横浜大空襲をも生き延びた歴史遺産として現存しており、今後の活用動向にも注目が集まっております。

#### 2.横浜市 神奈川台場

神奈川台場は横浜開港の翌年、万延元（1860）年に完成した人工島・海防砲台であり、明治32（1899）年の外国人居留地の撤廃に伴い廃止され、次第に埋め立てられて今日

に至るとのことですが、今回の発表をうかがい、位置の特定を含め未確認なことが多い遺跡であることを再認識いたしました。

この台場は、先に築造が開始された品川台場の構造が不十分だったとの風評から、勝海舟が設計したと聞いております。同じく人工島というと、横須賀育ちの私は、東京湾に浮かぶ海堡のことを思い浮かべました。海堡は三つありましたが、それぞれ大正12年の関東大震災により甚大なる被害を被り、また兵器の進歩によりその存在理由がなくなったため、放棄されて現在に至っております。その中でも第三海堡は近年撤去事業が完了し、一部陸揚げされ保存展示されていますので、皆様、機会がありましたら一度お出かけください。

海堡もそうですが、この神奈川台場は港湾海洋土木史の観点からみても大変貴重な存在であり、今後の研究に期待が高まります。

### 3. 藤沢市 東海道藤沢宿(藤沢市No.78 遺跡)

これは、文久3(1863)年の町割り図から、戦前まで続いた呉服商の商家の近世後期から近代の遺跡とのことでしたが、やはり目をひいたのは、石蔵の基礎と思われる石組遺構群です。蠟燭地業の下層には、さらに、松材の横木や杭が各々の状況に応じて施され、当時の地業の技術的高さと、施工方法を確認することができました。

現在、石造りの蔵を新築することはまずあるとは思えませんが、石蔵自体は目にする機会が多いことと思います。しかしながら、どの石蔵も地盤から上の建物本体しか見ることができず、今回のように地業や基礎の工法・技術に直接触れる機会は希であり、特筆すべき貴重な調査だったと思います。

言うまでも無く、建物を建設する場合、その地の地盤の状況を事前に知る事は、建物の設計をすすめる上で重要な要因です。現在では、地耐力測定やボーリングによる事前調査が可能で、地質調査技術と基礎地業の工法が確立しているため、その地盤にあった構造計

画を行えます。軟弱地盤であれば地盤の改良を、適当な支持地盤が無い場合は杭を打ったりします。また、降雨時にその地の表層に降る(流れる)雨の処理等にも配慮ができます。しかしながら、予期せぬ地中埋設物や水みち(水脈)が建設中にでてきた場合は、基礎計画や地下水の排水処理などの設計変更を余儀無くされることも少なくありません。

そういった意味においても、今回発掘された石蔵建築の基礎遺構群からは、部位ごとや施工する過程ごとに対応したと思われる沈降防止や排水対策等が見受けられ、伝統建築としてのみならず、現代の土木・建築技術の視点からも考察が必要なのではと感じました。今回は概観報告とのことでしたが、この現場についても今後の調査報告が待たれます。

### ■考古学的な視点と建築学的な視点

以前、建築設計をする者の立場で近代遺跡の発掘調査に参加した時のことですが、出土した建物の遺構をスケッチした際、こんな現象がありました。我々建築士のグループは、まずは通り芯をさらさらと描き出し、その上で出土した建物の基礎遺構をトレースしはじめたのですが、描き進めると言うように作業がはかどりません。変異変形をおこしたと思われる地中の遺構は、我々の予測に反し、上屋の通り芯とは違っていたからです。

その時、身を持って発掘調査と建築施工とのアプローチの違いを認識しました。考古学とは、調査・分析をする学問です。それ故に先入観をもたず、目の前にあるものを冷静にみつめることが必要なのでしょう。その反面我々は、つい、建設したときに張ったと思われる水糸を無意識に想定し、普段の設計作業の延長として施工時のことを想起してみつめてしまいがちです。

近代遺跡はその時代と時世的近さから、現代へと続く変革期の痕跡として存在していますが、当時の資料や技術・形態がすでに失わ

れている場合が多く、それゆえ、冷静に観察する考古学と我々のような分野の者による、互いの職能的長所を生かした共同調査や分析の必要性を強く感じた次第でした。

### ■神奈川の近代遺跡と近代化遺産

近代の遺跡というものが、地中や海中、沿岸から出土する都市の記憶だとすれば、神奈川には多くのものが存在しています。代表的なものとしては、三浦半島を中心とした砲台や壕・旧軍施設などの軍事遺構と、横浜を中心とした居留地や土木・港湾・産業遺構などがあげられます。

近年、上屋（構築物）が現存する場合、近代化遺産として認識した調査が行われるようになってきましたが、近代遺跡同様、未だ学術的・文化的な価値認識は低く、多くの対象物が基礎調査すら行われないうまま、解体撤去されていることが残念でなりません。

### ■歴史的文化遺産とヘリテージング

ここで、近代遺跡から少し離れて、近代化遺産の現状について記します。近代化遺産とは、幕末から第二次世界大戦期までの間に建設された、我が国の近代化に貢献した産業・交通・土木に係る建造物と定義されていますが、そういった位置付けの中で、近年、ヘリテージング（ヘリテージ：遺産の意）という観光レジャーとして、日本の近代化遺産を楽しもうとする動きが見られます。

これは、明治・大正・昭和初期に造られた生活・産業遺産を、「なつかしい」「めずらしい」「うつくしい」という観光視点で楽しむ新しいレジャーのことです。確かに近代遺跡と近代化遺産は、考古学・建築土木学・産業史上からも文化的・学術的な調査分析が必要なことはいうまでもありませんが、歴史的文化遺産という意では同じであり、新たな観光資源としてみることも必要になってきていると思われる。

最近になり、神奈川県内においても、ヘリテージマネージャー（仮称・歴史的建造物保全活用推進員）の育成プログラムが始動しました。これは、歴史的文化遺産を生かしたまちづくりを推進するため、歴史文化遺産を保全活用や創造的活用を核に、地域の活性化に参画する専門知識を有する者を育成するプログラムのことです。近代遺跡と近代化遺産は、その現存する形状や保存状態に差こそあれ、日本の文化・都市・産業発展の歴史的証拠物件として同一の財産だといえます。そこで、考古学や建築・土木・産業・歴史の専門家による、垣根をこえた総合調査のネットワークの確立が、今後の大きな課題なのではないかと痛感する昨今です。

### ■おわりに

折しも、今年（2009年）は横浜開港150周年の年であり、横浜市内においては様々なイベントが企画され、記念事業としての整備が急ピッチで行われております。近代遺跡のみならず、総合的な歴史遺産の価値認識と調査・保存・活用を推進する我々を取りまく活動環境が、新たな展開の転機となるよう、心から祈願する事でこの感想文を結ぶ事とします。

#### □執筆者紹介

氏名：関秀行（せきひでゆき）

昭和37年、横須賀に生まれる

昭和61年、多摩美術大学美術学部建築科卒

卒業後、建築設計事務所に勤務

現在、一級建築士事務所を主宰

職業：建築士

所属：神奈川建築士会

横須賀考古学会近世近代研究部会

横須賀建築探偵団

\*\*\*

## 黎明期の川尻石器時代遺跡の人びと

中川 真人

はじめに

相模原市城山町谷ヶ原二丁目に所在する国指定史跡川尻石器時代遺跡には、昭和5（1930）年に発掘調査された縄文時代の敷石住居が今も現地に公開されている。この時の調査結果は、石野瑛氏により昭和6年10月に「相模國谷ヶ原石器時代住居址群」として『史蹟名勝天然紀念物』第6集に掲載され、原稿用紙に書かれた直筆の原稿は、現在も神奈川県に保管されている。調査報告は以後、石野氏の著作物に何度か再録されている。

この屋外展示施設についての現在に至る経緯は不明だが、登記簿では昭和8年に分筆して川尻村が土地を買上げている。おそらくその時に整備されたものであろう。国史跡川尻石器時代遺跡として今も残る敷石住居から読み取れるものは何なのか、黎明期の川尻石器時代遺跡の歴史を振り返り考えてみる。

### 敷石住居発見前史と石野瑛

遺跡の発見以前、地元では土器の散布地として知られていたことが明治9（1876）年の絵図から窺い知ることができる。川尻村絵図「明治九年ノ図」（相模原市所蔵）に、遺跡のある一帯が「カンバ」と記され、「土器ノ破片散布ノ状態」としてマーキングされている。「土器ノ窯場ナラン」とも記されており、窯場があったと想定されていたようである。

考古学的な調査研究で中心となってくるのは、遺跡に何度も足を運んだ石野瑛氏である。石野氏は明治44（1911）年に神奈川県師範学校を卒業後、教育者として歩み、後に武相学園を創設した人物である（斎藤忠 1985年『考古学史上の人びと』）。大正9（1920）年に早稲田大学文学部史学科に入学し、在籍中の大正11年8月17日、石野氏が33歳の時に初めて谷ヶ原を踏査し、「遺物の可なり豊富なる遺

跡である」ことを確認している。石野氏はおそらく遺跡の重要性をこの時感じたのであろう。そのため、卒業後の大正13年5月23日にも再度踏査を行っている。その頃、地元で土器や石器を採集し、郷土の遺跡・遺物を見聞収集していたのが神藤市松氏である。三度、石野氏が川尻を訪れた昭和3年3月27日に、神藤氏は石野氏を案内し、採集した遺物の調査が行われている。

### 尚古会の設立

石野氏に遺跡・遺物の重要性を説かれた神藤氏は、地元住民と共に遺跡の湮滅、遺物の散逸を憂えて、昭和3年10月には「尚古会」という組織を立ち上げている。今で言う文化財保護団体である。

活動の実態は記録がないので不明であるが、組織については石野氏による記載がある（前掲）。尚古会の会長は小儀磯吉氏、副会長に加藤静氏が就任し、神藤氏は幹事長となっている。その他、川尻村8部落から1人ずつ幹事が選出され、運営されている。会員は昭和6年当時で150余名にも達している。昭和10年の川尻村の「村勢概要」によると、当時の人口は406戸2,304人である。いかに多くの村民が入会し、村をあげて遺跡・遺物の保存運動が積極的に展開されていたかがわかる。

### 敷石住居の発見

さて、地元農家の小池金六氏は、畑の耕作中に何度も石の集合した場所に遭遇していた。神藤氏が石野氏を案内し尚古会が設立された昭和3年には、小池氏は石が出た箇所を掘り広げ、瓢箪形に石が敷かれていたことを確かめている。柄鏡形の敷石住居と思われる。

小池氏が昭和4年初めに桑の植え替えで畑を掘っていたとき、やはり石を敷き詰めたものを発見したため、尚古会幹事長であった神藤氏に伝えた。そこで神藤氏に案内されたのが八幡一郎氏である。1月14日に案内された

八幡氏は、初めて川尻石器時代遺跡で敷石住居を発掘調査し、その成果を同年7月の『人類学雑誌』に「敷石遺跡の新資料」として発表している。これにより考古学の世界に知られるようになったのである。

調査後、小池氏は2月5日付けで史蹟名勝天然記念物保存法施行規則第4条により、遺跡を発見したことを神奈川県知事宛に申告している。これを受け、昭和5年4月に文部省囑託の古谷清氏が川尻に訪れたが、耕作物等の関係で調査を後日に期すこととし、改めて10月24～26日に調査が行われることとなった。調査は古谷氏とともに県の史蹟名勝天然記念物調査会の調査員となっていた石野氏と県職員の山田寅元氏、稲村坦元氏らによって行われる。また地元の小磯磯吉、加藤静、八木憲次、岡源明、小池金六、八木信義氏ら尚古会メンバーが全面的に協力しており、石野氏も調査報告に感謝の意を記している。まさに、住民との協働による発掘調査の先駆けである。

現在、屋外展示施設となっている敷石住居は10月26日に調査されたものである。地表下50～60cmで発見され、「三號敷石」と名付けられた(写真)。南北6.6m×東西2.7mの範囲に石が面的に敷かれていて、南北に長い楕円形を呈し、他の敷石住居と比べて大きいのが特徴である。敷石はさらに西側に広がっているようである。石野氏は前年に八幡氏が付近で調査した敷石住居と一つになる可能性を示唆している。敷石南東部では炉が2基検出され、中には灰が入っていたようである。この他2軒の敷石住居が発掘調査され、一帯

のボーリング探査も併せて行われた結果、34箇所の敷石住居を確認したとし、「石器時代における一大集落」と評価している。

この結果を受けて昭和6年7月31日に国史跡に指定され、今に残ることになるのだが、冒頭の調査報告書を書き上げる間、調査後も石野氏は何度も遺跡を訪れ、小池氏らによって収集されていた遺物の調査を行っている。

昭和5年11月19日に両頭の石棒を実見し、昭和6年5月24日には土製品の調査を行っている。この時の資料が晩期の土製耳飾であり、今も大切に保管されている。指定日となった7月31日にも訪れ、石器・石製品の調査を行っている。教育者として多忙な時を過ごしていた中での実直な調査研究に、石野氏の情熱と探究心に心打たれる次第である。

史跡が語るもの

川尻石器時代遺跡の発見史を読み解くと、そこに関わった多くの先人により、守り伝えられてきたことの歴史の重みを感じさせられる。ひっそりと今に残る敷石住居は、考古学者、地主と住民、行政との三位一体によりなした記念すべきものであり、文化財保存の原点として評価されるのではなかろうか。今、この敷石住居は、相模原市教育委員会によって確認調査が計画されている。関わる一人としての責任を噛みしめている。

最後に本稿作成にあたり写真をご提供いただいた小池徳治氏に記して感謝します。

【平成20年度考古学講座のご案内】

## 貝塚とは何か

縄文から近代まで

神奈川の貝塚にみる貝塚観の変移

開催日 2009 (平成 21)年 3月 8日 (日)

会場 横浜市歴史博物館 講堂

時間 9:30 開会 16:15 閉会

中村 若枝

貝塚という言葉を知ると、縄文時代をイメージする方も多いかもかもしれません。実際に貝塚の多くは、縄文時代の所産です。神奈川には、縄文時代を語るのに欠かせない貝塚がたくさんあります。一方、数こそ激減しますが、縄文時代以降も貝塚は作られ続けられており、つい先ごろまで鶴見川の河口付近でも、貝加工工場の脇に貝塚が形成されていました。

1877年(明治10年)9月、「まぎれもない大昔の塵棄場すなわち貝殻堆積(シェルヒープ)を発見し調査した」と大森貝塚発掘の第一報をネイチャーに送ったのは、エドワード・S・モースでした。モースは、ニューイングランド沿岸で調査をした経験から、一見して貝塚だと分かったと書いています。「貝塚とは、古代人が残したもので、人工的に堆積した人工遺物を含むもの」と定義し、日本列島にも石器時代が存在したことを明らかにしました。ここに考古学は巨人伝説から脱し、科学的研究の第一歩を踏み出しました。

モースの影響を受けた動物学者丘浅次郎は、1887年(明治20)1月4・5日に横須賀市の久比里村貝塚(江戸坂貝塚)を発掘しています。また1905年(明治38)に、横浜の山下町に居留していたイギリス人医師ニール・G・マンローは、三ツ沢貝塚(横浜市神奈川区)を発見し、日本で初めて大規模な発掘調査を行いました。さらに1941年(昭和16)桑山龍進により紹介された夏島貝塚は、その後の明治大学の調査で、カキの殻の放射性炭素年代測定ではBP9450±400、

木炭ではBP9240±500という縄文時代の開始時期を5000年近く遡るデータを得、最大最古の貝塚として話題となるなど、神奈川でも多くの研究者が研究成果を積み上げてきました。

では、貝塚とは、それを遺した人々にとって何だったのでしょうか。この命題は繰り返して問われてきました。

今回の講座では、「貝塚」という現象を、歴史の流れの中で考えてみたいと思います。縄文時代という自然と共生した人々が残した貝塚と、それ以後の貝塚とでは、形状、そして貝塚に関する意識に、変化はみられるのでしょうか？あるいは、社会構造は変わっても貝塚を築くという基底に流れる意識は、変わらないのでしょうか。そこで大きく「食糧採集経済期」と「食糧生産経済期」、「食糧流通経済期」の貝塚に分け、歴史の流れをたどる中で、このテーマを検証してみたいと思います。

大森貝塚発掘調査から、130余年たち、この間に調査された貝塚数は、膨大なものになりました。2008年3月、神奈川県立歴史博物館が編纂した縄文～古代を対象とした『神奈川県貝塚地名表』によれば、確認された貝塚数は292ヵ所にのびます。折しも、1959年今日の貝塚研究の基盤を築いた酒詰仲男が『日本貝塚地名表』をまとめ上げてから、今年でちょうど50年になります。

縄文から近代まで、貝塚とは何かを問い、各時代における貝塚観を明らかにする中で、この問いに一つの答えを書き足すことができればと思います。

また、今回の講座では特別講演として、戦後の日本の貝塚研究を牽引されてきた金子浩昌先生と、自然科学の側面から研究されてきた松島義章先生に、神奈川の貝塚についてお話していただきます。

(プログラムの詳細は同封のチラシをご覧ください。)

考古かながわ 第40号

<http://www.koukokanagawa.net>

e-mail soumu@koukokanagawa.net

発行:神奈川県考古学会 会長 岡本 孝

発行日:2009年2月10日

編集:秋田かな子・中川真人・野口浩史(連絡誌担当)

印刷:(有)湘南グッド